



TITLE:

佐波先生の学問をふりかえて -  
保険論を中心として -

AUTHOR(S):

谷山, 新良

---

CITATION:

谷山, 新良. 佐波先生の学問をふりかえて - 保険論を中心として -. 経済論叢 1968, 101(5): 498-501

ISSUE DATE:

1968-05

URL:

<https://doi.org/10.14989/133269>

RIGHT:

# 經濟論叢

第101卷 第5号

---

哀 辞

故佐波宣平教授遺影および原稿

ミュール型紡績工場 .....	堀 江 英 一	1
部門間の連関構造 .....	山 田 浩 健 井 原 之 雄	23
原価管理思考としての変動予算概念 .....	野 村 秀 和	43
低開発国開発計画における技術選択 .....	名 畑 恒	64

記 事

佐波教授逝く

追悼講演 (山田浩之 前田義信 谷山新良 森嶋通夫 上田三四二)

追 憶 談 (葛城照三 安間進)

故佐波宣平教授自作年譜

---

昭和43年5月

京 都 大 学 經 済 学 会

## 佐波先生の学問をふりかえって

——保険論を中心として——

谷 山 新 良

保険論における先生の御業績と御活躍を、(1)保険論における学問的業績、と(2)保険学会における御功績にわけて申述べてみたいと思う。

### 1. 保険論における学問的業績

研究生生活34年にわたる先生の保険論に関する御業績は、著書2冊、随筆集1冊、学

術論文51点の多きに達している。しかも、その1つ1つが、すべて、その時どきの最先端をいく、独創性に満ちた、水準の高い名作であった。

紙面の都合もあるので、そのうち、2冊の著書と論文2点について先生の御業績を顕彰したい。

先生が自らあげられた「4つの大きな業績」のうち実に2つは保険論の領域に属している。すなわち、『再保険の発展』（昭・14）および『C.I.F. 価格の巨視分析』に代表される一連の保険の巨視的分析の2つである。前者は古典経済理論と歴史理論の有機的一統一を特徴とした前期の代表作であり、後者は数理経済学を駆使された後期の代表作である。

まず、『再保険の発展』は、年代順に言えば4大業績の第1番目に位する著書である。これは昭和14年に出版された、先生34歳のときの作品である。本書の学説史的意義と特徴は、単純に元受保険の立場から再保険を概念し分析してきた従来の研究方法に物足りなく感じられた先生が、元受保険と再保険を併せ考察する研究態度、換言すれば再保険を恒久的な危険分担関係として捉え分析した、方法論的にも内容的にも画期的な名著である。

保険論の研究方法是、本書によって、それまでの法律的的形式的研究方法から経済的本質的研究方法に置きかえられることになった。また、内容的には、先生の前期の研究態度であった「史的発展に於てもものを見その歴史的意味を掴もうとする」立場が貫かれており、再保険の本質と歴史的意義が美事に把握され展開されている。本書は、先生にとっては処女作であるばかりではなく、原稿を1年余りも温められ推敲に推敲を重ねられただけに、なみなみならぬ愛着と自信をもっておられた書物である。

この本は再保険の古典であり、戦後、幾度か版を重ねたにもかかわらず需要はつきず古本市場でも異常な高値をよんでいる名著である。

4大業績のうち、年代順に言えば第4番目にあたるのが「C.I.F. 価格の巨視分析」（昭・36）に代表される保険のマクロ分析である。

保険は、元来、大数法則に依拠して営まれる社会経済的仕組であるから、すぐれてマクロ的存在である。ところが、従来の保険論では、保険を個別経済的（ミクロ的）にのみ考察して、社会経済的（マクロ的）には研究されていなかった。そこで、これに気付かれた先生が、ここでもまた先駆者として、保険のマクロ的分析に先鞭をつけられたのである。その研究成果が昭和36年の「C.I.F. 価格の巨視分析」にはじまる精力的な一連の論文であった。そして、その「discourse 追論（余論）」である「産業連関表における保険業の産出額」これこそが昨年12月6日法経第7教室で、痛み止めの薬を打たれ、全力をふりしぼってなされたあの退官記念講義であったのである。この講義を最後に先生

は京都大学ともこの世とも永遠に訣別されたのである。晩年の先生が情熱をこめて研究された保険のマクロ的分析を詳しく跡づける紙面がないのは残念である。結論を要約すれば、先生が退官記念講義で言われた「本論」は経済学における個と全との関係、いいかえれば「結合の誤謬 Fallacy of Composition」に関する問題である。すなわち、C I F 価格は単価(ミクロ)的には、価格=原価+営業保険料+運賃  $p=c+i+f$  であるが、集計(マクロ)的には 原価総額+営業保険料総額+運賃総額  $P=\sum c+\sum i+\sum f$  ではなく、原価総額+付加保険料総額+運賃総額  $P'=\sum c+\sum i+\sum f$  である<sup>2)</sup>、というのが先生の発見された「真理」であり、「本論」の結論である。

この結論から退官記念講義のテーマとなった「discourse 追論」が生まれた。これを要約すれば、アメリカ合衆国労働省作成の産業連関表、およびそれを直輸入したわが国の通産省の産業連関表が、生命保険業においては付加保険料総額  $\sum f$  をその産出額 Output として正しく定義しているが、損害保険業においては営業保険料総額  $\sum i$  ( $=\sum n+\sum f$ ) をその産出額として定義しているのは明らかに誤りであり、過大評価である。よって、損害保険業においても営業保険料総額  $\sum i$  ではなく、付加保険料  $\sum f$  をその産出額とすべきである、というのが先生の御主張であった。けだし、当然のことであり、ゆえに通産省も昭和40年の産業連関表においては、付加保険料を保険業一般の産出額として正しく、一元的に定義している。幸にも先生の「Meine Zeit」は御存命中に來たのであり、その意味で先生は G. J. メンデルよりも仕合せな学者であった<sup>3)</sup>。

以上が4大業績のうちの2つについての要約である。

このほかにも多くのすぐれた御業績があるが、ここではそのうちの2つについて述べることにしたい。

まず、『保険学講案』(昭・26)。これは大学における保険学のテキストとして出版されたものであり、第1編原理と第2編数理から成っている。原理編は「研究生生活34年」の前期17か年の先生の研究方法の特徴であった歴史的研究と古典学派的経済理論が統一的に展開されている保険経済理論である。他に類例をみない本書の特徴は第2編保険数理にある「保険数学ぬきの保険論の講義」というものはしっかりした柱を使わないで家を建てるような意味のないもの<sup>4)</sup>であるとは先生年来の御信念であったが、本書にはこの御信念から実に懇切丁寧な保険数理が展開されている。すなわち、『保険学講案』は保険経済理論と保険数理とを併せもつ、世界でも例のないすぐれた保険学テキストである。

いま1つの記念すべき御業績は、昭和10年9月の『経済論叢』に発表された「保険価額規定無用論」である。この論文の内容に触れる余裕がないので、ここではこの論文の学説史的意義について述べることにする。この論文は理論的にも実践(保険事業)的に

も重要な問題を提起していたので、ひとたび論文が発表されるや、当時の新進気鋭の保険学者が一せいに立上って大論争を展開した。この論争の過程を通じて多くの問題が提起され、研究され、よって以て保険学の水準を著しく高めた忘れ難き論文である。

この論文は、こうして、ただに日本の保険学の発展に大きな影響を与えたのみではなく、それはまた他ならぬ先生御自身にも決定的な教訓を与えた。先生は時につけ折にふれ「私はこの論争を通じて、学問の厳しさ、寂しさ、苦しき、楽しきをしみじみ思い知った」と述懐しておられた。この意味においても、「保険価額規定無用論」はまさに歴史的な論文である。

以上が保険論における先生の4大業績の概要である。

## 2. 保険学会における御功績

先生はこよなく保険学を愛され、また「まことに温かい雰囲気<sup>の</sup>学会」と口ぐせのようにいっておられた保険学会の発展に貢献された。昭和25年秋の再建第1回の保険学会以来今日にいたるまで、保険学会理事として学会の運営に当たられただけでなく、さらに病軀をおしてたびたびすぐれた研究を発表され、聴く者に多大の感銘を与えられた。

また、多くの保険学者とはとくに親交され、心と心の友情を温めておられた。先生が病の床につかれるや保険学会および保険学者がいたく心痛し、心からなる激励をされたのも故なきことではない。

こうして、保険学会の発展のために尽された御功績もまた永久に減すべからざるものがある。

## 3. むすび

「人生は短く、芸術は長し」といわれる。先生の御生涯は63年と45日の短いものであった。しかし、研究生生活34か年にあげられた成果たる学術著書10冊、翻訳書4冊、学術論文139編、随筆3冊は、まことに雄大深遠な大業績であり、それらは未来永劫にわたって燦然と輝きつづけるであろう。謹しんで先生の御冥福を祈る次第である。

(1968. 3. 12)

1) 佐波宣平『再保険の発展』序文。

2) 営業保険料=純保険料+付加保険料、すなわち  $i=n+l$

3) 遺伝学史上に不朽の業績を残しながら、生存中には認められなかった Gregor J. Mendel (1822-84) は「Meine Zeit wird schon kommen.」いまに見ろ、きっと俺の時代が来る。今にもやってくる。という言葉を残して死去した。そして、予言通り、死後18年目の1900年に、『雑種植物の研究』(1866)の出版後34年にして、Mendel の「Meine Zeit はきた。(佐波先生退官記念講義「産業連関表における保険業の産出高」草稿より。)

4) 退官記念講義「産業連関表における保険業の産出類」草稿。